

神話 —「ニラを植える守り人」

かつて、人と人とを結ぶ務めを担った 守り人 がいた。
彼女は、夜を徹して見張りを続け、生徒と癒し手とを繋ごうとした。
だが人の身ゆえ、ついに眠りに落ちてしまう。

暁が訪れると、隣にいた男の癒し手が告げた。
「そうなることを知っていた」と。
その言葉は、彼女の張り詰めすぎる心を見抜く声であった。

守り人は二つの布団を畳み、
「これは務めのためだけのもの」と語った。
それを聞いた若き同僚の女は「ああ、それは谷の人！」と呼び、
彼の存在を識っていた。

やがて昼、ひとりの母より言葉が届いた。
「よく働かれましたね。
けれどもどうか、ニラを植えてください」
それは、大地に根を張り、繰り返す芽吹く力の象徴であった。

時は移り、守り人は生徒らの背を見送った。
彼女は道を整え、石垣を慎重に降りる。
その横を、他の若者たちが次々と上へ登っていった。
——若きものは未来へと昇り、
守り人は地を確かめ、下りてゆく。

さらに古き家を改めるとき、
守り人は荷の運びを指示した。
かつての順序を逆にし、
過去を覆し、新たな秩序を築くように。
雨が降りしきるときには、傘を掲げ、弱き者を守った。

そして、海。
果てなき水の間において競いが行われた。
一人の若き者が、波間に浮かぶ環へと、

次々と的確に得点を重ねた。

嘲りの声を受けながらも、その手は揺らぐことなく。

守り人は水を分け、泳ぎながらその姿を見届けた。

——こうして天と地と海を巡り、

守り人は学びを得た。

力を尽くすことと、休むこと。

守ることと、任せること。

古きを逆さにし、新しきを植えること。

その果てに、母の声は再び響く。

「根を張りなさい。芽吹きを信じなさい。

あなたこそ、ニラを植える守り人なのだ」